



日 時：平成26年8月10日（日）

会 場：大阪府鍼灸師会館 3階

講 師：日本鍼灸研究会代表 篠原 孝市 先生

・『脈状診の歴史 脈診の歴史に関する一考察』

台風の雨の中、行われた講義。その内容は盛りだくさんなので、お話頂いた内容を抜粋してご報告します。

【序 前提】 脈状は、中国では『脈象』って言うんです。これは、比較的新しい言い方で、元（げん）の時代の滑伯仁（かつはくじん）あたりから始まったものです。脈拍の言葉の定義は二つあるが、歴史的に重要視されてきたのは、指先を介して感じる実際の脈拍じゃなくてそれを見るための枠組みの方という風になります。

【Ⅰ.『脈經』一相類】 『脈經（みやくきょう）』（西晋時代）というのは、『素問』『靈樞』『難經』『傷寒論』『金匱要略』という五つの文献プラス、現在残っていないもの。多数の残っていない文献からの引用が生きています。つまりオリジナルのものというより編集のものだということですね。『脈經』（みやくきょう）の「二十四脈状」の記述部分が後の時代に幅広く影響を及ぼしたという点では非常に重要なものだという風に思います。二十四脈状の影響というのは現在までの伝統医学の脈状学の枠組みを、今でも支配し続けている。形は大きく変わって原型を留めてないくらいですが、それでも尚現在のものに影響を与えています。「二十四脈状」とは、脈の形状が似ているものをくっ付け合せて、脈の体系を作ったということをまず頭に入れておくことですね。

【Ⅱ. 隋唐の脈書—陰陽】 隋唐時代には、経穴もある程度整理されますし、脈をみるために最も重要な脈状の枠組みというものも整理されます。『千金方』（孫思邈そんしぱく）『備急千金要方』）の中に出てくる脈状の枠組みと、『千金翼方』（孫思邈）の中に出てくる脈状の枠組みです。

『脈經』で出てきたものが『千金方』に基本的にはそのまま引き継がれて、『千金翼方』から転換して、そしてその転換した内容が『七表八裏三部脈』とか『玄感脈經』とか『王叔和脈訣』とかを経て北宋時代以降の脈證ぐらいまで続くという大きな流れになります。

『千金方』は、何をしたかといえば『脈經』の二十四脈を使って、そして一対にするという。浮沈とか滑濡とかいう一対の形にしたということが分かります。遲数というのも一対になっていますね。

この相類に対して相対、つまり一対にする。対になったものを一対にするというのは、これは『千金方』では完成してないんですね。しかしこの一対にするという発想は後々非常に重要なものとして生きてきます。『千金翼方』というのは後々の七表八裏九道の新しい脈状の走りという風にみることが出来ます。

【Ⅲ. 『王叔和脈訣』系の脈書—七表八裏九道】『千金方』以来関心とされるところは、ずっと続いている。その内容は五蔵の診察法、「七表八裏九道」、左右寸関尺、予後、諸證の脈状、婦人と小兒の脈状。その中核はなんといっても七表八裏九道である。

【Ⅳ. 宋元の脈書—七表八裏九道の陰陽論的修正】 崔嘉彦『紫虛崔真人脈訣秘旨』、劉開『脈訣理玄秘要』、施發『察病指南』がある。

【Ⅴ. 明清の脈書—原理】 『診家樞要』というのは1300年代、元の終わり頃のものですけれども、この辺りから脈診というものは七表八裏九道という宋・金・元時代の脈診から脱皮し始めます。著者の滑伯仁という人は『素問』に関する本を書いていますし、『難經本義』も書いています。この書で滑伯仁のやったことの特徴的なものは、『千金方』以来の相對という觀念を復活させたことです。それで、この相對の觀念は『千金方』から得たものではなくて、恐らく崔嘉彦（さいかげん）たちの「浮沈・遲數」によって脈状を解析するということから恐らくヒントを得たのだという風に思っております。

【結語】 日本の脈診というのは、空想的なもの、文献学的なものを別にすれば、1970年代までは六部定位脈診しか無かったわけですから。この六部定位脈診から脈状診を取り入れる時に取りあえず『三因方』（陳言『三因極一病證方論』）のような南宋時代の四脈によって、病因、病證を決める方法を取り入れたというのは、さほど異常なことでは無かったという風に思っています。

しかし、ここから二十四脈状に至るには、恐らく南宋時代の人たちがやったように、あるいは明清時代の人々がやったように、この四脈状あるいは滑伯仁のような六脈状（浮沈遲數滑濇〈ふ・ちん・ち・さく・かつ・しょく〉）からいかないと、恐らく二十四脈状に直接触れるってことは出来ないんじゃないかなというのが、この「脈状診の歴史」をまとめてみて一番感じることです。

それで七表八裏九道というものの謎というのはもちろん、まだあるわけですが。しかし全部を通覧してみると七表八裏九道の脈というのは、ただ陰陽の脈診の延長に過ぎないのではないかと。二十四脈状を陰陽の脈（陽脈7、陰脈8）に分けた後で残ったものが「九道の脈」ということで、これはある意味で言うと『脈經』以来の脈の枠組みというのを陰陽で解析すると「九道」（くどう）がこんな風に残ってしまうということではないかと。

（素問勉強会世話人 東大阪地域 松本政己）

